

	名古屋大学農学部 同窓会報	発行所	名古屋大学農学部同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	小谷亜由美・矢野勝也
		発行人	藤井 潔
		印刷所	株式会社 クイックス

「不屈」と「社会への貢献」

名古屋大学大学院生命農学研究科長・農学部長 前島正義

農学部同会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃から農学部ならびに生命農学研究科の教育研究活動にご理解とご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。そして今春、卒業・修了される皆様にお祝い申し上げます。

農学部では750名、研究科では470名が学び、130名の教員と50名弱の事務・技術職員、そして多くの非常勤職員・研究員によって教育と研究が支えられています。毎年、約180名の学士、150名の修士、30名の博士が巣立ち、心に張りつめたものを感じつつ第一歩を踏み出しています。就職状況は全国トップクラスです。新しい歩みの先で、同窓会員の皆様が先達として明かりを灯し、あるいは背中を推していただいています。

この機会に、名古屋大学と農学部・生命農学研究科の近況を紹介させていただきます。何より、本学の赤崎勇特別教授と天野浩教授がノーベル物理学賞を受賞されたことは、先が見えない中でも努力を積み重ねる人々への大きな励みとなりました。赤崎先生は「不屈」、天野先生は「社会への貢献」との言葉を表明されました。先日、赤崎賞表彰式での座談会の席で、「受賞者と同じ35歳の時、赤崎先生は何をされていましたか。」との記者の質問に、「あの頃は研究者といえるような状態ではなく、結晶作製のための装置を自分で作っていました。土方のようなものでした。」と答えておられました。自分の手で実験装置をつくり、その装置で実験を積み重ね開発してこられた年月を振り返られ、次の世代へのメッセージとして「不屈」という言葉を選ばれたものと推測します。国内外の同窓生の皆様とお会いした時には、学生当時は認識できなかったけれど、素晴らしい大学の卒業生であることに誇りを持ち、気持ちがぐっと前に進む、との言葉を頂いて

います。

そうした状況の中でも、大学改革が大きく進められています。高等教育の枠組みと財政に政府の意向が強くなってきています。その中には世界最高の教育研究の展開拠点の形成、大学での研究成果の実用化によるイノベーション創出など強いメッセージが盛り込まれています。昨年度の研究大学促進プログラムでの高い評価に引続き、今年度、名古屋大学はグローバル大学創成支援プログラムのトップ型大学として認められ、濱口総長をはじめとして世界をリードする研究拠点の形成、アジアサテライトキャンパスの船出(最終的に7ヶ国)、留学生(現在1700名余)受入と日本人学生の留学(現在400名余)支援を実施しています。大学院生もスイス、オーストラリア、英国などの大学で、一人での研究研修をし、大きく成長して帰国しています。若手教員・女性教員の積極的な登用など、時代を画する事業展開をしています。国際化を見据えて英語での授業も広がっています。

こうした状況の中で、農学部・生命農学研究科は、特色ある世界トップクラスの高い研究実績を活かし、農学諸分野のフロンティアとして新しい学問領域を世界に先駆けて創出・発展させることを目指しています。複数のグローバル大学院プログラムでは、研究展開力に加えて、国際的視野をもつ逞しい大学院生を育成することを目的に、本学の理学・工学・医学・環境学研究科等と連携して、新しい視点での教育プログラムを推進しています。これらのプログラムでは大学院生が国内外の企業研究所訪問・研修、国際会議での研究発表、各種スキルセミナーの受講、研究科を超えた講義の履修と学位審査、アジアと欧米大学での研修が



進められています。勤勉さに加えて、国を超えて人々の力を束ね、新しい事業を展開できるタフさと、さまざまな人と共鳴できる精神的しなやかさをもつ若者たちが輩出されていきます。

学生の資質を磨き、力を伸ばすことが大学の役割ではありますが、人はそれぞれ生まれつきの美しさ、素晴らしさをもっているとも考えています。競争・スピード・成果ということが強く言われる時代の中で、学部学生の年代は精神的にも不安を抱える時期であることは世界共通ですので、大学全体での学生支援に加えて、今年度から学部独自の学生相談室を設置しました。学生は、悩みも夢もちつつ自らの道を切り拓いています。厳しい社会で困難を乗り越え活躍されている同窓生の皆様の姿が一番の大きな励みです。

経済や教育のグローバル化の中、ワンダープラネット地球も、人類が生存し続ける上で社会・自然環境の限界点を迎えています。経済的な格差、民族・宗教・国家間の係争、食糧、衛生、高齢化、エネルギー、環

境汚染など山積する課題があります。その中で、大学は学術上の知を創出し続けることが重要ですが、加えて世界と地球をとりまく深刻な課題を解決する視点と努力が求められています。農学部・生命農学研究科は、学科や専攻間の垣根が低く、皆さんが学んだ50の研究室が協力し、先端機器も共通利用しつつ、互いの知恵を交流・交換して研究を推進し、学生には多様な環境を提供し、新しい学問を創り出す努力をしています。アジア・アフリカに視点を向けた農学国際協力教育研究センターも国内屈指の活動を展開し、そして、世界をリードするイネ研究を通して近未来の食糧確保のための研究活動をしている生物応答研究センターも極めて高い評価を得ています。

同窓会員の皆様には安心して見守っていただけるよう、明るい話題を中心に述べさせて頂きました。会員の皆様のご健康とますますご活躍、そして農学部同窓会の発展を心より願っています。

農学部同窓会会長挨拶

藤井 潔 (昭和54年3月卒業農学科)

窒化ガリウムによる青色発光ダイオードの発明と実用化により、名古屋大学名誉教授で名城大学終身教授の赤崎勇博士と名古屋大学工学部の天野浩教授、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の中村修二教授の3氏がノーベル賞を受賞されましたことは、昨年の大きな明るい話題でした。心よりお喜び申し上げます。近年、名古屋大学ゆかりの先生方がノーベル賞を受賞される快挙が続いており、学部は違いますが、同窓生の一人として母校への尊敬の念を強くしております。

なお、赤崎先生は、小生の恩師である植物遺伝育種学講座の蓬原雄三名誉教授と旧制第七高等学校時代の同窓だと、蓬原先生からお伺いしました。今回の受賞は農学部にも浅からぬ縁があると感じております。

将来、緑の革命のノーマン・ボーローグ博士や、トウモロコシの遺伝研究でトランスポゾンを発見したバーバラ・マクリントック博士のように、独創的で実用的な研究成果により、名古屋大学農学部の先生がノーベル賞を受賞される日もそれほど遠くないのではと、密やかにご期待申し上げている次第です。

天野先生は、「門のない大学」に象徴されるように、

自由な雰囲気の中で長年研究に打ち込めた名大の学風の良さを強調されてきました。テレビで拝見する天野先生のお人柄がそれを体現しているように感じます。

小生は学部卒ですが、天野先生の意見に同感しています。「学問・真理の前には皆が平等である」との自由な雰囲気が農学部でも確かに共有されていました。

卒業後に農業試験研究、中でもイネとコムギの育種に長年携わることとなりましたが、「抵抗性崩壊の起こらない(農家に迷惑かけない)いもち病抵抗性品種」や「品質世界のオーストラリア産 ASW よりおいしい日本麺のできる小麦品種」という「常識はずれの夢」を追いかけて過ぎて過ぎた30年間でした。

前者は、イネ縞葉枯ウイルス抵抗性品種の発現する、「葉いもちに対しては弱く、穂いもちに対しては特異的に強い抵抗性」に着目し、その「穂いもち抵抗性遺伝子」*Pb1*を同定して DNA マーカー選抜(MAS)によるいもち病抵抗性育種に道を開きました。愛知県で栽培されているイネの約6割が *Pb1*を保有しています



が、30年に渡って抵抗性崩壊は起こっていません。

後者は、愛知県産の新しい小麦品種「きぬあかり」として日の目を見ました。日本麺に最適な「コシ」を持たせるために、グルテニン蛋白質のMASによる品質育種を世界で初めて行って開発した品種です。

幸運なことに、ゆで麺にASWにはない風味と甘みがあり、おいしいうどんやきしめんができるとの評価を手打ち職人さん達から頂いています。「きぬあかり」は、多収性も生産者から高く評価されており、おかげ

さまで順調に普及が進んで、今年、愛知県で作付面積が「農林61号」を抜いて第一位の品種に育ちました。

個人的な思い出を書き綴って恐縮ですが、過去の常識にあまり囚われない新しい発想で、オリジナルな育種による品種開発を行えたのも、名大農学部 of 自由な学風に触れることができたおかげかもしれません。

今年も6月6日(土)に開催される同窓会総会で皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

平成27年度名古屋大学農学部同窓会、総会、講演会、懇親会のご案内

平成27年度名古屋大学農学部同窓会、総会、講演会、懇親会を下記の日程で開催します。皆様お誘い合わせの上、ふるってご参加ください。懇親会、講演会へのみの参加も歓迎いたします。

○期 日：平成27年6月6日(土) *名大祭期間中*

○総 会

時間：午後2時～3時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○講演会

九州大学大学院理学研究院生物科学部門准教授

粕谷 英一 氏 第25回(昭和54年3月)農学部農学科卒業

『動物は食べられるのを避ける』

生物は自分を食べるさまざまな生物の脅威にさらされている。動物は、自分を餌にされるのを防ぎながら餌を食べ繁殖しているとも言えるだろう。捕食の圧力は様々な手段での捕食への対抗策を進化させる。だが、捕食回避だけしていると他の活動ができなくなる。

動物の自分を食べる相手への対抗手段の進化についてお話しする。

時間：午後3時～4時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○懇親会

時間：午後4時30分～6時30分

場所：名古屋大学内“レストラン花の木”

会費：1,000円

同窓会を開きませんか!?

農学部同窓会総会を機に、久しぶりに農学部に集まって同窓会を開催しませんか? 農学部同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。是非、同窓会事務局(dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp)まで事前にご連絡下さい。必要に応じて、同窓会ホームページを掲示板としてご利用いただくこともできます。

定年退職

土壌微生物から農学国際協力へ、道半ば

農学国際教育協力研究センター 浅沼修一

私は農学国際教育協力研究センターに2005年4月に赴任しました。前職は国際農林水産業研究センター（JIRCAS）です。岩手大学から1972年に名古屋大学大学院農学研究科修士課程に進学し、博士課程修了後、日本学術振興会奨励研究員や大学院研究生いわゆるオーバードクターとしてつなぎ、ナイジェリアの国際熱帯農業研究所（IITA）にポストドクの職を得て名大を離れたのが1979年11月、26年ぶりに戻ったこととなります。



大学院では、イネ幼植物の無菌水耕栽培法を確立し、根面細菌が根の形成、特に側根や根毛形成を助長して養分吸収を高めることを明らかにしました。走査電顕による根面微生物の観察、透過電顕による細菌の鞭毛の観察に心が躍りました。また、作物の河野恭廣先生から根の解剖学的観察手法を伝授され、土壌の熊田恭一先生には学位審査の時にイネの根を書いてみなさいと質問され、黒板に書きましたが、これでいいものが冷や汗ものでした。谷田沢道彦先生ははじめ学内外のいろいろな先生に教えを請い、現象を多角的に攻めることを学んだことが良かったと思っています。

IITAでダイズやカウピーの根粒菌の研究を始め、ナイジェリア、ニジェール、ブルキナファソ、ケニア、マラウイで圃場試験を経験し、4年後に帰国して、九州東海大学農学部、北海道農試、九州農試で研究を継続し、接種技術の開発には土壌中での微生物生態研究が必要であること、しかしきわめて難しいことを痛感したところで実験室を離れました。JIRCASではインドネシアのファーミングシステム研究やブルキナファソの砂漠化防止プロジェクトに責任者として関わり、また沖縄支所ではフィリピン、フィージー、ニューカレドニアの研究者と熱帯島嶼研究プロジェクト仕込みのための国際シンポジウムを開催しました。

農国センターでは、まず、北川勝弘教授の置き土産であったGISフリーソフトの途上国での普及を目指すJICA集団研修から始めました。講師陣や現地研修の依頼に大阪市大、京大東南アジア研、京都府大、農環研、JIRCASなど様々な機関に頭を下げて歩いたことがいい思い出です。農学部事務職員、院生、ポストドク研究者にインドネシア、ガーナ、ケニア等の現地

を経験してもらい、事務手続の国際化や若手人材のキャリアパスにいささか貢献できたことも嬉しいことでした。振り返ってみますと、国内外の農学人材の育成のほか、“生命農学研究科も他の大学も一緒に途上国の農学研究を”と思ってやってきました。自らは横原先生とともにアフリカ稲作の研究を、また名大の文化人類学、地学、作物学、土壌学等の学際研究チームでケニア・ビクトリア湖畔の土壌荒廃地域の環境保全と地域文化の調査を6年間継続しましたが、中途半端な結果で終わることが悔やまれます。

農国センターは全国唯一の農学国際教育協力拠点として、教育・人材育成、研究、ネットワーク形成の3つのミッションを掲げ、研究では学際領域の学問を統合し開発途上国における農学領域の諸問題の解決に貢献するとしています。このことが道半ばで終わることが残念ですが、後に続く者に対する課題として引き継ぎます。10年に満たない短い期間でしたが、充実した時間をありがとうございました。同窓会が今後ますます国内外での多様なキャリアパスをサポートする母体となることを期待しています。

退職を迎えて

害虫制御学 田中利治

ついこの間、名古屋大学にお世話になることになったと思ったら、もう終了の時期になってしまいました。平成2年に農学部の助手として赴任し、もう24年もたってしまったこととなります。



「光陰矢のごとし」でしたが、いろいろ学生と一緒に学べ、ほとんどわからなかったことがすこしわかりかけてきたところで一区切りになってしまいました。

大学の授業で、「地球上に存在する生物はお互いに複雑な関係を持って存在している」ということを習ったのですが、どのようにしたらその複雑な関係を調べることができるのだろうかという疑問を学生の頃に抱いていました。たまたま寄生バチと寄主の関係を研究している先生がいて、心を引かれてその先生の門をたたいたのが、現在の研究の出発点です。昆虫が好きで少年でもなかったのが、最初のうちは虫とつきあうことも大変でした。

地球上に生息する寄生バチ類は少なくとも20万種類以上いるので、全昆虫種の約100万種の2割が、他の

昆虫類に寄生していることになり、地球上に生息する生物はお互いに関係を持って生活しているといえます。作物が健全に育つための害虫防除にも必要な寄生バチの特徴を解き明かすことは重要だろうなどと考えて研究を始めました。寄生バチの中でも、最も高度に進化しているのは、寄主の体内に入り込み、産んだ卵の発育に都合のいいように寄主の生理状態を制御する内部寄生バチという仲間です。通常寄主となる昆虫類は、体内に侵入してきた異物を排除する免疫機構を持っていますので、それを回避しなければなりません。寄生バチは、ハチというくらいですから毒液を持っていますが、それ以外に共生ウイルスを持っていて、卵を寄主に産み付けるときと一緒に注入し、寄主の免疫をコントロールしています。寄生後にウイルス遺伝子の発現で寄主本来の遺伝子発現を抑制し、防御反応を回避しています。寄生バチの卵および幼虫に対する免疫反応だけを抑制し、ほかの感染した細菌などに対する防御反応は働いています。また寄生バチは、寄主体内で発育することから養分を寄主にあまりダメージを与えずにもらうことが必要です。これも寄主の脂肪体を部分的に消化する手段を使っていることがわかりました。

わたしの大学の教員としてモットーは、自分の背中を見て学生が育ってくれることでした。だから、毎日楽しく研究をすることで私にはできなかった全く新しい着想を持った学生が育ってくれるのではないかと考えています。結局は私自身が楽しんだだけかもしれませんが、最近の大学の置かれている状況は、自由さがなくなりつつあるのではないかと感じています。大きく大学は変わらなければならぬ時期に来ているとは思いますが、先生方は毎日やたらに忙しく、日ごとの生活に追われゆっくり学生と数十年先のことなど様々な話をする時間もなくなっているような気がします。大学の大学たる良さを失わないように気をつけていかなければならないのではないのでしょうか。

退職を迎えて

全学技術センター(農学) 内藤 壽朗

昭和54年7月に名古屋大学農学部就職して、35年間お世話になりました。

農学部就職する以前は、名古屋大学プラズマ研究所で非常勤の職員として働いていましたので、その期間を含めると40年近く名古屋大学にお世話になったことになりました。

農学部での仕事は、アイソトープ実験室の安全管理

の業務でした。農学部就職したころは、 ^3H と ^{14}C の標識化合物を利用した取り込み実験が主で、それほど忙しいとは感じてはいませんでした。その後、DNAシーケンシングや、ハイブリダイゼーションによる特定配列のDNA、RNAの検出法の普及により ^{32}P 標識のヌクレオシドの標識化合物の利用が加速的に増加し、実験室の利用状況は活気に溢れるようになりました。最盛期の平成3年ごろには非密封のラジオアイソトープの年間購入件数は、400件近くあり、その受入れ手続きだけでも大変な作業でした。利用者は、200人以上いて、実験室は何時も学生や教員の方で混雑していました。多くの方が、夜中でも実験されていたようです。当時、このような状況は他の大学や研究所でも同様で、当然、アイソトープの紛失や汚染事故が度々起こりその都度、新聞やテレビで取り上げられ世間を騒がすこととなりました。当時の関係省庁である、科学技術庁や文部省は言うに及ばず消防署や警察署まで神経をとがらせる状況が続き、安全管理もさることながら、関係省庁や部署からの通知や通達、立入検査、様々な調査書の報告などの対応で忙しかったことを記憶しています。しかし、近年、蛍光による検出手法の普及により遺伝子レベルの研究で利用された ^{32}P で標識したヌクレオシドの使用数量は激減し、現在では、年間購入件数が数件となり私が就職した当時の状況に戻ってしまいました。今思えば当時の活況ぶりは、少々異常だったのかもしれませんが。現在は、そのころに比べると実験室は閑散としており、科学技術の進展の速さを感じる昨今です。なにはともあれ、アイソトープ実験室は農学部の多くの方々にご利用いただき、多くの先生や学生の皆様と接することができ、充実した時期を過ごさせて頂くことができました。特に、公私ともにお世話いただいた農学科の養蚕学教室の先生方や学生の皆様には、研究室旅行などにもお誘いをいただき、大変楽しい時を過ごさせていただいたことを心から感謝しております。また、農芸化学、食品工業化学、代謝制御等の研究室の先生方には、所用で、研究室にうかがった時にも、お茶を御馳走になったりいろいろ御親切にいただき、ありがたく思っております。

長い間お世話になりました、農学部・生命農学研究科の皆様には、ここに感謝とお礼を申し上げます。そして、名古屋大学農学部同窓会の皆様の健康と発展を心からお祈り申し上げます。

定年退職教員の紹介

さらに、今年度は水野猛 教授(ゲノム情報機能学)が定年退職を迎えられます。



卒業生の言葉

4年間を振り返って

生物環境科学科 森林気象水文学研究分野 山田 純司
念願の名古屋大学に入学してから早4年。未だ卒業する実感がわかず、4月から自分が社会人として働いている姿が想像できません。この4年間を思い返してみると、名古屋大学での生活は私が生きてきた中で最も自由に自分のやりたいことができ、最も自分の生き方・考え方に影響を与えた時間でした。

高校までの与えられたカリキュラムをこなす学習スタイルとは異なり、自らが学びたい授業を選んでいく学習スタイルとなり、専門科目だけでなく、経済学や日本文学など直接専攻分野には関わりのない科目を学ぶことで自らの視野を広げるきっかけとなりました。その一方で、学部の授業ではさらに専門的な知識を学ぶことができ、自らの興味・関心を追及していくことができました。その中でも、座学で日本の林業の厳しい現状を知ったこと、実習で森に入り森林の荒廃具合を目の当たりにし衝撃を受けたこと、そしてそのような状況下でも林業従事者の方が現状を変えようと職務に誇りを持って取り組んでみえたことは今でも記憶に鮮明です。研究室に入ってから自分やりたいテーマで不自由なく研究させてもらえました。自らが研究計画を立て、考察し、結果をまとめることがいかに難しいのかを痛感しました。

学業以外でも様々な経験をしました。塾講師のアルバイトでは、なかなか思うように生徒に言いたいことが伝わらず、先輩に助言をいただいたり、指導教本を読み自らの教え方を改善したりしました。その分、生徒からテストの点数が上がったと聞いたときは本当にうれしかったです。このことがきっかけで、多くの人の役に立つような仕事がしたいと考えるようになりました。以前からの夢であった、自転車旅行に行くこともできました。岐阜から香川を目指す途中に家に泊めてくれたり、地元を案内してくれたりした友人たちにはとても感謝しています。途中自転車がパンクし、周りの店が閉まっていく中で必死に自転車修理店を探したのも今となってはいい思い出です。

様々な人に出会い、数々の経験ができたこの4年間はとても幸せでした。4年間共に学び遊んだ友人、迷惑ばかりかけた研究室の先輩方、研究の助言だけでなく考えて行動することの大切さを教えて下さった先生方には感謝してもしきれません。そして、こんな好き勝手やっていた息子を支えてくれた家族に心から感謝しています。



4年間を振り返って

資源生物科学科 動物機能制御学研究分野 小林 茜
この大学生活4年間を振り返ってみると、本当に充実した、濃密な4年間だったと感じます。たくさんのことを学び、体験し、駆け抜けた大学生活でした。

小さなころから生物について学びたかったため、大学に入り農学部の専門的な授業を受け、新しい知識が増えていくことがとても嬉しかったのを覚えています。実験実習では細胞からウシやヤギまで幅広い生物を扱いながら、実験の基礎を学びました。生物を扱うからこそうまいかないこともありましたが、それも良き教訓として今の研究に生かせていると思います。4年生になり研究室に配属されてからは試行錯誤の実験の日々でした。研究では、1つ前に進めば、また1つ新たな課題が生まれるということはこの1年で体感しました。しかし、良い結果が出た時など1つ前に進めた時の嬉しさや、もっと深くまで追求してみたい！というわくわく感は他では味わえない素晴らしいものだと感じます。

また、学業以外にもさまざまなことを体験し、学ぶことができました。2年生の春休みには福島県の小さな山村にボランティア活動に行き、過疎地域が抱える問題や、震災から2年の月日が過ぎた後でも風評被害等で苦しむ農家の方の姿を目の当たりにしました。しかし、その中で活動し続ける村の方々の姿に強く心を打たれ、ボランティアとして行った自分の方がパワーをもらったように感じました。

また、3年生の時には、タイとカンボジアでの海外実地研修に参加しました。タイ、カンボジアの学生とともにグループを組んで行うこの研修で、私たちは畜産についての調査を行いました。隣国であるにも関わらず、タイとカンボジアでは大きく異なった畜産を行っており、その違いにとても驚きました。また、現

地の学生との不慣れな英語での意思疎通では、自分の言いたいことがうまく伝わらないという歯がゆさもありましたが、その分最後のプレゼンテーションが終わった後の達成感は大きなものでした。この研修を共にしたタイ、カンボジアの友人とはいまだに連絡を取り合っており、そのうちの1人は、日本に旅行に来た際に名古屋まで会いに来てくれました。かけがえのない経験、かけがえのない友人をこの研修では得ることができました。

このような素晴らしい大学生活を送ることができたのは、周りの方々の支えのおかげだと感じています。私を支えてくださった家族、先生方、先輩方、友人たちに、深く感謝いたします。

来年からも私は現在の研究室で、大学院生として研究を続けていきます。もっと知りたい!という好奇心を大切に、より広い視野を持って研究に打ち込んでいきたいと思えます。



私の4年間

応用生命科学科 分子細胞制御学研究分野 鈴木千尋
入学当初は長いと感じていた4年間も、あっという間に過ぎてしまいました。大学生活を振り返ると、学部の勉強やサークル活動のなかで様々な経験をしてきました。初めて経験することも少なくなく失敗することもたくさんありましたが、これらの経験は私に前向きな変化をもたらしてくれたと思っています。

私は、高校時代生物が好きだったからという理由で農学部に入りました。当時はここで何を学びたいかはあまり考えていませんでした。そんな中、講義で専門的な内容を教えていただいたり講演などで最先端の研究のお話を聞いていくと、もっと知りたいと思ったり次々に疑問が湧いてくる分野がありました。このような分野は自分が興味をもっている分野だと気づき勉強を進めていくうちに、自分がやりたいことを見つけることができました。また、研究室に配属されてからは、自分で組み立てて実験を行うこともあり、新しい

ことを発見したり、知識を深めることに面白さを感じています。

もう一つ、私に大きな変化を与えてくれたのが、サークル活動です。大学生15名ほどでチームを組み、100名ほどの中学生に対して学習習慣の指導などを通して受験のサポートを行って来ました。大勢の中学生にただ自分の考えを話すだけでは、なかなか思っていることは伝わりません。伝えるためには、話の構成や話し方を工夫する必要があります。はじめは意識しても伝わる話し方はできませんでしたが、他のスタッフの話し方から学びながら、だんだんと上手に話せるようになりました。また、ミーティングでスタッフから出る意見は自分では考え付かないものも多く、そんな仲間と意見を交わすことで自分の考え方の幅を広げることができたと思っています。

私のこのような前向きな変化は、周りの人がいてくれたからのものです。感謝の気持ちを忘れず、これまで以上に様々なことに挑戦していきたいと思えます。



修了を迎えて

応用分子生命科学専攻
高分子生物材料化学研究分野
山口慶人

時の流れは本当に早いもので、もう6年間という長い学生生活の終わりを迎えようとしています。この6年間は研究、一人暮らし、アルバイトなど、私にとって初めての経験ばかりで、自分の視野を広げることができた刺激的な期間であったと感じています。

中でも、4年生からの研究室での生活は貴重な経験でした。今までは先生方の講義を聞いて、勉強するといった受身のスタイルであったのに対し、研究は自分で考え、実験するという自ら行動するスタイルでした。最初はその変化に戸惑い、うまく実験を行うことができず、落ち込むことも多々ありましたが、先生方や先輩方の丁寧なご指導、同期との励ましあいにより徐々に成長し、研究を進めることができました。その甲斐あって、京都および金沢での学会発表を経験しま

した。この研究生生活を通して、PDCA サイクル（Plan：計画、Do：実行、Check：評価、Act：改善）やコミュニケーション力など、社会人に向けての基礎を身につけることができた実感しております。また研究だけではなく、ボーリング大会やソフトボール大会、年に一度の研究室旅行なども良き思い出です。例えばソフトボール大会にむけて実験の合間にキャッチボールをしたり、実験後にはバッティングセンターにも通うなど、研究室一丸となって頑張り、ポリマーズカップという名大高分子系の研究室のソフトボール大会では準優勝という輝かしい成績をおさめることができました。過去42年の歴史の中で未だ叶わぬ優勝まであと一歩です。また、研究室旅行でのパターゴルフ大会、ろくろ体験、みかん狩りなど楽しい思い出も多かったです。

最後に、楽しいことやそしてつらいことを一緒に乗り越えてくれた研究室のメンバー、そして懇切丁寧に

ご指導いただいた先生方に深く御礼申し上げます。また、思い出深い学生生活をともに過ごしてくれた農学部仲間、そして陰ながらもこれまで誰よりも私を支えてくれた家族に感謝いたします。



平成26年度総会、講演会、懇親会、ならびに農学部第10回卒業生および修士第8回卒業生の卒業50周年記念祝賀会の報告

平成26年6月7日（土）、農学部第3講義室において総会を行いました。平成25年度の事業・決算報告を行った後、平成26年度役員を選出し、平成26年度事業計画・予算を審議しました。総会終了後、神谷典明氏（有限会社 マシキ・ジャパン 取締役社長）による講演「私のインドネシア人生」を開催しました。講演終了後、「レストラン花の木」にて懇親会を開催し親睦を深めました。

同日、名古屋大学農学部大会議室において、農学部第10回卒業生および修士第8回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を、農学部談話会と共同で開催しました。平成17年に始まったこの祝賀会も9回目を迎え、卒業生、談話会会員、現職員ならびに同窓会役員合計53名が出

席して盛大に行われました。祝賀会では、出席いただいた方々からの近況報告をいただき、互いの旧交を温めておられました。さらに、生源寺眞一教授（食糧生産管理学研究分野）による記念講演「日本農業の生きる道：TPP 交渉と担い手問題を考える」も行われました。

第11回卒業生ならびに大学院第9回修士の卒業50周年記念祝賀会は、平成27年6月6日（土）に開催する予定です。懐かしい先生方にもご参加いただけるかと思っておりますので、記念祝賀会へのご招待状が届きましたら、万障お繰り合わせの上、ご出席ください。祝賀会、講演会、懇親会に関する情報は農学部同窓会ホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

平成26年度名古屋大学農学部学術交流基金助成事業の採択者一覧

(農学部学術交流基金助成は農学部創立50周年記念事業の一環として行なわれています。)

- ・氏名：吉村 文孝
- ・職名：全学技術センター(農学)・副技師
- ・助成の種類：海外派遣
- ・研究題目等：ラングストン大学アメリカヤギ研究所の視察
- ・氏名：マルザバエフ マルセル (Murzabaev Marsel)
- ・職名：大学院生命農学研究科博士課程後期課程2年
- ・助成の種類：海外派遣
- ・研究題目等：249th ACS(American Chemical Society) National Meeting & Exposition における研究成果発表

人事異動(平成26年1月～12月まで)

日付	氏名	異動内容	職名	
生命農学研究科				
H26.3.31	畑 信吾	退職	教授	龍谷大学教授へ
H26.3.31	井上 直子	退職	助教	生命農学研究科特任准教授へ
H26.4.1	前島 正義	兼務	研究科長	26.4.1—28.3.31
H26.4.1	肘井 直樹	兼務	副研究科長	26.4.1—28.3.31
H26.4.1	戸丸 信弘	兼務	専攻長	生物圏資源学専攻 26.4.1—27.3.31
H26.4.1	森田(寺尾)美代	兼務	専攻長	生物機構・機能科学専攻 26.4.1—27.3.31
H26.4.1	堀尾 文彦	兼務	専攻長	応用分子生命科学専攻 26.4.1—27.3.31
H26.4.1	服部 束穂	兼務	専攻長	生命技術科学専攻 26.4.1—27.3.31
H26.4.1	土川 覚	兼務	学科長	生物環境科学科 26.4.1—27.3.31
H26.4.1	大蔵 聡	兼務	学科長	資源生物科学科 26.4.1—27.3.31
H26.4.1	森 仁志	兼務	学科長	応用生命科学科 26.4.1—27.3.31
H26.4.1	原田 一宏	採用	教授	兵庫県立大学准教授から
H26.4.1	山篠 貴史	昇格	准教授	助教から
H26.5.1	池田 素子	昇格	教授	准教授から
H26.5.1	中川 優	採用	准教授	理化学研究所から
H26.6.1	佐藤 育男	採用	助教	農業環境技術研究所から
H26.8.1	西内 俊策	採用	助教	
H26.10.1	村瀬 潤	昇格	准教授	講師から
H26.11.16	大井 崇生	採用	助教	
生物センター	なし			
農国センター	なし			

農学部同窓会ホームページ案内

祝賀会、講演会、懇親会の模様、農学部研究室の変遷などに関する情報は農学部同窓会ホームページ (<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>)に掲載中です。住所変更の案内もございます。是非ご覧ください。

平成25年度 事業報告

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成25年 6月 8日、名古屋大学農学部において総会を行った。
総会終了後、永井 雄太郎 氏 (JA あいち経済連 営農支援センター) による講演「残留農薬分析—その方法と農産物の安全安心対策における役割—」を開催した。講演会終了後、名古屋大学「レストラン花の木」にて懇親会を開催した。
- 2) 卒業祝賀会の開催
平成26年 3月25日に農学部談話室にて卒業・修了祝賀会を開催した。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成26年 3月に発行した。
- 4) 卒業50周年記念祝賀会の開催
平成26年 6月 7日、名古屋大学農学部大会議室において第10回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を農学部談話室と共同で開催した。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に、同窓会ホームページの充実をはかった。
- 6) 同窓会名簿の管理
全学同窓会名簿システムとの連携をはかった。同窓会名簿の更新を行うとともに、名簿情報の提供を行った。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力した。
- 8) 同窓会費の二重払いへの対応
同窓会費を二重支払いした会員へ返金案内を送付した。

平成26年度 事業計画案

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成26年 6月 7日、名古屋大学農学部において総会を行う。
総会終了後、神谷典明氏による講演『私のインドネシア人生』を開催する。講演会終了後、名古屋大学「レストラン花の木」にて懇親会を開催する。
- 2) 卒業・修了祝賀会の開催
平成27年 3月25日に農学部談話室にて卒業・修了祝賀会を開催予定。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成27年 3月に発行予定。
- 4) 卒業50周年記念祝賀会の開催
第11回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を開催予定。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に、同窓会ホームページの充実をはかる。
- 6) 同窓会名簿の発行および管理
全学同窓会名簿システムと連携し、名簿の充実と管理について改善に努める。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力する。
- 8) 同窓会費の二重払いへの対応
同窓会費を二重支払いした会員への返金対応を行う。

名古屋大学農学部同窓会 平成25年度決算

【収入の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会費等	1,368,000	永久会費	580,000	29名
		年会費	415,000	83名
		寄付金	343,000	71名
		広告掲載費	30,000	2件
卒業50周年祝賀会費	80,000		80,000	40名
総会懇親会費	27,000		27,000	27名
前年度繰越金	25,162,098			
合計	26,637,098			
(実質収入 1,475,000)				

【支出の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,165,622	会報印刷・発送	1,163,918	9000部
		振込手数料	1,704	2件
総会	215,120	講師講演料	30,000	
		講師交通費	4,000	
		役員交通費	40,600	3名
		懇親会費	140,520	
卒業50周年祝賀会	149,511	飲食代	118,000	
		事務費	31,511	案内状印刷・発送
卒業・修了祝賀会	300,965	飲食代	122,000	
		記念品代	178,125	
		振込手数料	840	1件
役員報酬	132,000	役員報酬	132,000	11名
支部支援金	91,680	関東支部	60,000	
		関西支部	30,000	
		振込手数料	1,680	2件
アルバイト代	250,000		250,000	事務補助
郵便振替手数料	19,160		19,160	
その他諸費用	83,715	交通費	24,000	関東支部総会出席および講演
		交通費	6,300	学外理事理事会および卒業式出席
		課税納付	18,107	役員報酬、交通費、事務補助
		二重払い返却	20,105	永久会員費および手数料
		事務用品	395	
		会計事務関係郵送費	280	
		談話会参加費	4,000	
		談話室備品	2,980	
		二重払い処理関係	7,548	
次年度繰越金	24,229,325			
合計	26,637,098			
(実質支出 2,407,773)				

名古屋大学農学部同窓会 平成26年度予算

【収入の部】

費 目	金 額 (円)	細 目	金 額 (円)	備 考
会 費 等	1,480,000	永 久 会 費	600,000	30名
		一 般 会 費	400,000	80名
		寄 付 金	420,000	70名
		広 告 掲 載 費	60,000	4件
卒業50周年祝賀会・ 談 話 会 会 費	70,000			35名
総 会 懇 親 会 費	25,000			25名
前 年 度 繰 越 金	24,229,325			
合 計	25,804,325			

【支出の部】

費 目	金 額 (円)	細 目	金 額 (円)	備 考
会 報 発 行 費	1,200,000			9,000部
総 会	214,600	講 演 料	30,000	
		講 師 交 通 費	4,000	
		役 員 交 通 費	40,600	3名
		懇 親 会 費	140,000	
卒業50周年祝賀会	140,000	飲 食 代	100,000	
		事 務 費	40,000	印刷・発送
卒業・修了祝賀会	300,000	飲 食 代	130,000	
		記 念 品 代	170,000	
役 員 報 酬	132,000		132,000	11名
支 部 支 援 金	90,000	関 東 支 部	60,000	平成26年度分
		関 西 支 部	30,000	平成26年度分
ア ル バ イ ト 代	250,000			事務補助
郵 便 振 替 手 数 料	30,000			
そ の 他 諸 費 用	454,000	役 員 交 通 費 (理 事 会)	10,000	
		談 話 会 参 加 費	4,000	年 2 回
		課 税 納 付	20,000	役員報酬・交通費・アルバイト代
		事 務 費	20,000	発送、コピー
		会 費 過 払 返 却	400,000	
余 剰 金	22,993,725			
合 計	25,804,325			

平成26年度 同 窓 会 役 員

名誉会長	前島 正義	(研究科長・学部長)	会 計	大島 健司	(分子生体制御学)
会 長	藤井 潔	(学外)		青井 啓悟	(高分子生物材料化学)
副 会 長	服部 束穂	(植物細胞機能)	名 簿	犬飼 義明	(プロジェクト開発)
関東支部	石川 靖文	(学外)	ホームページ	阿部 秀樹	(水圏動物学)
関西支部	加藤 壽郎	(学外)	会 報	小谷亜由美	(森林気象水文学)
総 務	矢野 勝也	(作物科学)	会計監査	今井 貴規	(循環資源利用学)
	河合 慶親	(食品機能化学)	事 務	宮田 久代	(生殖科学)



関東支部だより

関東支部長 石川 靖文 (S56食D)

関東支部では、昨平成26年11月22日(土)、東京神田神保町學士會館で第17回総会を開催した。参加者は25名(ゲスト2名)であった。今回は、全学同窓会関東支部『若鯨会』事務局長の伊藤志織さん(H6法)が見学を希望されたので、特別参加いただいた。

総会では、小職から支部の現勢を報告し、次いで日本生物地理学会長の森中定治さん(S47農)に「昆虫少年のオデッセイー会社勤めをしながら、趣味の研究で学位を取る」のテーマで講演をしていただいた。また会員からの要望もあり、テノール独唱とヴァイオリンのミニ・コンサートを開催した。

支部現勢は、「農学部同窓会会員録」平成26年度版に基づき名簿を改訂したところ、会員1,151名(前年1,113名)で若干増であった。その内メールで連絡可能な会員は427名(同352名)で、2割増となった。

森中さんの講演は、平凡なサラリーマンとしての一生を送る筈であった昆虫好きの少年が、思いがけない出会いにより、母校で学位を取得、日本生物地理学会長になるまでの経緯を主としてのお話であった。

大学で害虫学を専攻し製薬会社に就職した森中さんは、ずっと農業の開発に携わっていた。平成7年46歳の年に医薬学部へ異動になり、分子生物学の知識が必要になったため、放送大学で基礎から勉強し直したが、そこでチョウが大好きな毛利秀雄副学長と出会った。そのご縁で東京大学教養学部松本研究室に出入りするようになり、DNAの実験技術を習得した。

平成11年、名古屋学術室への異動を機に母校・宮田正教授のところでカザリシロチョウの分子系統学の研究を開始した。会社勤務の合間、平日夜7時以降およ

び土曜・日曜日に大学の研究室に詰め実験に勤しんだ。その成果として、14年、Molecular Phylogenetics and Evolutionに論文を掲載、宮田先生の勧めもあり、15年に学位論文を提出し博士号を取得することができた。

その頃の森中さんは、日本生物地理学会の事務方として次期会長候補へのネゴを担当していたが、なかなか色よい返事がもらえないでいるうちに時間切れとなり、当時の会長・酒井精六先生にその旨伝えたとこ、(酒井)「それじゃあ君が会長やってくれ」(森中)「博士号を持っていないのでやれません」(酒井)「それじゃあ1年以内に学位を取ってくれ」

ちょうど学位論文を執筆中でもあり、要請を受けることにし、平成14年4月に会長に就任。その直後は、学会財務の立て直しに注力、サラリーマン時代の経験を活かし、赤字体質からの脱却を図ったとのことである。

会長就任以来の森中さんの関心は、生命と人類の未来の考察にあり、その一環として、日本生物地理学会の主催で、シンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」を毎年開催しているとのことである。

ミニ・コンサートのテノール独唱は、森中さん、またヴァイオリン演奏は、関東支部幹事で東芝フィルハーモニー管弦楽団コンサート・ミストレスの小西千晶さん(H2林産)によるものであった。

森中さんは、お得意の次の3曲を歌われた。長時間の講演直後であったが、伸びやかな美声を披露された。
ーオー・ソレ・ミオ(イタリア・ナポリ民謡)
ー初恋(石川啄木の詩。日本歌曲不朽の名作)
ーオー・ホリー・ナイト(キリスト教のミサ曲)
小西さんには、曲の解説を交えながら、バラエティに富んだ次の7曲を演奏していただいた。

ータイスの瞑想曲(歌劇「タイス」の間奏曲)

ーユーモレスク第7番(ドヴォルザーク)



- ー琵琶湖周航の歌（三高寮歌）
- ー少年時代（井上陽水）
- ー川の流れるように（美空ひばり）
- ー星に願いを（ディズニー「ピノキオ」主題歌）
- ーチャルダッシュ（ハンガリーの民族舞曲）

お二人は、ともに「花よりお酒」とかで、森中さんには「名大ビール」、小西さんには「なごみ桜」と、それぞれのお好みのお酒を贈りお礼とさせていただきます。

コンサートの締めとして、森中さんのリード、小西さんの伴奏で、学生歌「若き我ら」を全員で歌った。

コンサートの後は、森中さん・小西さんを囲み全員で記念写真を撮影。一旦休憩の後、木村健一さん（S36 畜M）に音頭をお願いし「なごみ桜」で乾杯、懇親会に入った。懇親会では、『若鯨会』伊藤事務局長に挨拶いただいた。また森中さんの著書『ブルトニウム消滅！一脱原発の新思考』の著者サイン本の販売を行った。

次回第18回総会は、本年11月28日（土）13：10～17：10 學士會館203号室で開催の予定である。

名古屋大学農学部同窓会関西支部だより

関西支部長 加藤 壽郎（S45農M）

同窓会関西支部も早くも発足して10年が過ぎました。平成26年11月8日には、記念すべき第10回総会を大阪弥生会館で開催いたしました。今回は、14名の同窓生の方にお集まり頂き、総会、講演会につづき、懇親会を和気藹々の雰囲気の中で行うことができました。当日、仕事のご都合や他の会合との重なりなどで、例年出席されている方が出席できなくなったこともあり、前回より参加人数は減りました。しかし、今回も3名の初参加がありまして、年々、少しずつですが同窓会の輪が広がってきていることを嬉しく思っております。ただ、関西在住の同窓生は名簿上、800名を超えており、まだまだ、皆さまへのご連絡や皆さまのご都合・ご希望に添った運営ができていないのではないかと危惧いたしております。

さて、総会議事の後、例年、同窓生にご講演をお願いいたしておりますが、今回は大阪労災病院病理診断科部長として活躍されておられる三輪秀明先生にご講演いただきました。先生は、昭和60年農学科の養蚕学教室博士課程を終了されましたが、その後、一転、大阪大学医学部へと進まれ、お医者さんへの道へと歩まれた異色の方です。ご講演では、若い時の農学部養蚕学教室で研究された内容から始まり、現在取り組まれている病理組織診断、特に、大腸がんや乳がんに関連した病理組織診断のお話を頂きました。若い時の研究と現在の病理診断は、その対象や技術などは大きく異なりはしますが、様々な表面事象からその中に隠れている普遍的な法則を捉えようとする姿勢には一貫したものがあると感じられました。先生は、日頃、多くのがん患者さんの病理組織の診断をしておられるわけですが、ご講演の中で、先生が、病理組織の中のわずかな異変を見逃さない鋭い観察眼を持っておられることを垣間見ることができ、感銘を受けました。今回の同窓会開催前に先生から、「会員の方からご質問があれば、事前にお聞かせ願ひ、お答えしたい。」とのご提案があり、会員の方から数件の質問を寄せていただきましたが、それにつきましても、お話を頂きました。先生のご専門ではない分野でも、いろいろお調べ頂き、ご見解を伺うことができました。ただ、十分な時間がなく、事務局として、もう少し時間をとっておけばよかったと反省した次第ですが、先生のご好意により、当日の資料を読みたい方には資料をご提供頂けるとのことですので、事務局へご依頼いただければと思います。

ご講演を終えたあと、午後の3時間は例年のごとく、懇親会を開き、楽しく食事や歓談を致しました。ご参加者全員に近況報告をしていただくことになっており、今年も皆様から楽しいお話をお聞きすることができました。様々な分野で様々な人生を送っておられる方のお話は、実に感慨深いものであります。毎回感じることはありますが、農学部出身の方は、本当に幅広い分野で活躍されており、ご苦労されていると同時



にロマンを持って人生を生き抜いておられるように思います。これまでご都合でお越しになれなかった方も是非とも一度足を運んでいただいて、雰囲気を感じ取っていただければ幸いです。

平成27年度の同窓会総会は11月7日と予定いたしましたが、例年、会場として使っている大阪弥生会館が9月に閉鎖になるとのことで、他の場所を探すこととなります。同窓会関西支部が発足して10年がすぎ、会場の変更のこともあり、この際、同窓会の進め方について、皆様からのご意見をお伺いし、それを反映させていただいて、会を運営していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(事務局連絡先) 寺前朋浩

〒669-1103 西宮市生瀬東町37-23

Eメール: rikatomo@ares.eonet.ne.jp

名大遠州会だより

遠州会農学部幹事 佐々木 健 (平成5年畜産)

名大遠州会は、静岡県西部(大井川以西)に居住または勤務する名古屋大学、大学院若しくはその前身校出身者から構成され、平成8年に設立されました。同窓会を毎年、また総会は隔年で開催しています。平成26年は、第10回総会と第19回同窓会を6月14日(土)18時にオークラクトシティホテル浜松にて約80名の会員が集い、名古屋から濱口総長、伊藤全学同窓会代表幹事の来賓をお迎えして開催しました。

総会では、平成24、25年度の事業報告、会計報告の審議、承認、同時に新役員の選出、承認等が行なわれ、議事終了後、来賓の濱口総長、伊藤代表幹事の御二方から挨拶がありました。この総会の様子は静岡新聞と中日新聞の取材があり、後日両紙に名大遠州会第19回同窓会として掲載されました。

総会終了後、場所を宴会場に移し、卒業年代の近いグループで指定されたテーブルにつき、大久保名誉会長の乾杯の発声で懇親会を開始しました。懇親会では、



世代と学部を越えた幅広い交流が盛んに行われ、和気あいあいとした雰囲気の中で懇親会は大いに盛り上がりました。また、私、佐々木の司会進行により、今回初めての企画としてビンゴゲームを行いましたところ、これまた大いに盛り上がりました。そして最後に恒例の集合写真を撮影し、来年の同窓会への出席を皆で約束して、21時前に懇親会は終了となりました。

さて、本年は第20回同窓会をオークラクトシティホテル浜松にて、6月13日(土)18:00に開催予定ですが、それに先立ち遠州会20周年記念としてノーベル物理学賞受賞の天野浩教授の講演会も予定しております。天野教授の講演会の会場は現在未定ですが、これらに関する案内状は例年通り4月上旬頃に郵送しますので、奮っての御参加をよろしくお願ひいたします。

連絡先: 遠州会農学部幹事 佐々木健

〒431-3192 浜松市東区半田山1-20-1

浜松医科大学 解剖学講座 神経機能学分野

Tel: 053-435-2293 Fax: 053-435-2290

Email: tsasaki@hama-med.ac.jp

農学部談話会だより

農学部談話会世話人代表 柳沼 利信

農学部談話会は平成14年に、「農学部OB同志の親睦、現役の方々との交流をはかるために気軽に歓談する機会を」との趣旨で当時の名誉教授を中心にして設立されました。会員は農学部在籍した教員・職員および現役の農学部長・研究科長、並びに教職員が主ですが、この輪をさらに同窓生にも広げ、「農学部と親しむ会」として発展できればと願っています。この談話会は毎年3月と11月の第2週金曜日の夕刻に農学部隣接するグリーンサロン東山「花の木」にて例会を、また6月には農学部同窓会と共催し、農学部・生命農学研究科の現状報告および話題提供者の講演を柱に開催しています。話題提供には「農学と社会」の視点に立ってできるだけ時宜を得たものをと心がけています。本年の企画のうち、3月の第39回農学部談話会、次いで6月の農学部同窓会との共催による第40回農学部談話会については、以下のように開催を計画しています。

同窓生諸氏の積極的なご参加を募り、農学部談話会を盛り上げていただくことを心待ちにしています。

記

第39回農学部談話会

日 時：3月13日（金）、午後5時～7時

場 所：名古屋大学キャンパス内グリーンサロン東山
「花の木」

会 費：夕食代を含め2千円

農学部の近況：前島正義 生命農学研究科長

講演：家畜の繁殖制御をめざす技術科学（仮題）

当研究科生命技術科学専攻動物生産科学第

1研究分野教授 大蔵聡氏

第40回農学部談話会

（農学部同窓会主催による第11回農学部卒業・修了50周年記念祝賀会と共催）

日 時：6月6日（土）、午前11時30分～午後2時

場 所：名古屋大学農学部大会議室

会 費：昼食代を含め2千円

記念講演：農学国際教育協力研究センターの現

在、過去、未来（仮題）

当研究科生物圏資源学専攻循環資源学

研究分野教授 山内章氏

農学部談話会についてのお問合せ等は世話人代表の
柳沼利信（〒467-0044 名古屋市瑞穂区柏木町1-11-4、
電話 052-834-1963、E-mail yaginut@agr.nagoya-u.
ac.jp）までお寄せ下さい

農学部の話題 —2014.01.01～2014.12.31—

（「名大トピックス」より許可を得て農学部関係の一部を記載）

- ・農学部と盛田株式会社などが共同で開発した本学の八重桜から採取した酵母「名大桜酵母」を使った純米酒「なないろ桜」が26日に販売される 2014.2.22中日（朝刊）
- ・生源寺眞一生命農学研究科教授が審査委員長を務める第73回中日農業賞について「農業体験者や消費者らとの交流を通じ経営者としての力が鍛えられる」と講評 2014.3.14中日（朝刊）
- ・藤田祐一生命農学研究科准教授などの研究グループはらん藻が窒素固定するのに必須のたんぱく質を作り出す遺伝子を発見 2014.4.22読売
- ・「木で未来をつくろう！ in 愛知県」開催：4月27日 佐々木康壽生命農学研究科教授が講演 2014.5.27中日（朝刊）
- ・研究現場発：空気を栄養にする植物をつくる 藤田祐一生命農学研究科准教授 2014.6.3中部経済新聞
- ・生源寺眞一生命農学研究科教授が生産調整などの農政について「むしろ農協が制度や政策を担うことの是非を問う議論が必要だ」と語る 2014.8.3日経（朝刊）
- ・ラジオ公開講座「おもしろいことは“境界”で起こる」：講師 川北一生命農学研究科教授 2014.8.17中日（朝刊）
- ・田中隆文生命農学研究科准教授は土砂災害から身を守るために「家の中でも少しでも安全な場所に移動してほしい」と語る 2014.8.21中日（朝刊）
- ・第41回全日本大学選手権大会（インカレ）ボート競技：女子舵手なしペア 優勝 榊原舞子さん農学部4年生と関根優佳さん医学部保健学科3年生 中野富夫法学研究科准教授は「制約の多い合宿生活を選び、文武両道が頼もしい」と語る 2014.9.3中日（朝刊）
- ・解説スペシャル：人口減対策 注目の農村 生源寺眞一生命農学研究科教授は日本農業の活路について「付加価値を高める取り組みで農業経営の厚みを増すこと」と語る 2014.10.29読売
- ・ESD ユネスコ世界会議：学生200人会議支える 渡辺健太さん経済学部4年生と深谷祥葉さん農学部4年生がボランティアとして活躍 2014.11.11朝日（夕刊）
- ・大場裕一生命農学研究科所助教はサクラエビが青く光る姿をカラーで撮影することに成功 2014.11.30中日（朝刊）

お知らせ

アグリ60ゴルフ会に参加しませんか

アグリ60ゴルフ会は農学部OBの60才以上の人達で構成されています。毎年春と秋に定例会を開催し、最近では森林公園ゴルフ場をホームコースにしています。

この会は15年前に、昭和32年卒の横井正芳さん(故人)の提案で始まりました。会の主旨は、農学部卒業生も定年世代となるので、ゴルフを通じて懇親の場を作ることでした。設立大会を平成11年に多治見CCで開催し、以来、毎年2回を定期開催してきました。昨秋の会では、最高齢の80才の方が元気に参加される一方で、健康上の理由での欠席も多くなり、新規に入会を勧誘することに決まりました。

入会資格は60才以上のゴルフ愛好者でハンディは問いません。会費等も不要です。入会希望の方はメールで下記アドレスまで申し込んでください。次回は平成27年5月21日(木)を予定しています。多数の方の参加をお待ちしています。

世話人 福井敏夫 f.toshio@nakahyo.co.jp

幹事 板谷清三 seizo1206@me.com



林産学科50周年記念祝賀会のご案内

1965年(昭和40年)4月に林産学科が設立され、50周年を迎えます。この間、約800名余の卒業生を輩出し、関連業界の人材育成および木質科学の発展に貢献してまいりました。農学部は二度の組織改編を経た後、林産学科の系譜は現在の6研究室(森林化学、生物材料工学、生物システム工学、高分子生物材料化学、生物材料物理学、循環資源利用学)に引き継がれています。このたび、設立後50年という時期を迎えるにあたって、下記の通り、記念祝賀会を催します。どなた様も奮ってご参加ください。

記

日時: 2015年7月4日(土) 13:00~18:00

会場: 名古屋大学野依記念学術交流館

内容:

基調講演

沖 修司氏(林・S54卒・林野庁次長)

鈴木滋彦氏(S51卒・静岡大学副学長)

澤木良次氏(S45卒・大建工業株式会社代表

取締役会長)

パネルディスカッション

「これからの林産学と林産業のあり方」

パネラー: 伊神裕司氏、鷲見章氏、林和男氏、

麓英彦氏、牧田雄介氏

懇親会

会費: ¥5,000

申込方法: 下記口座への振込をもって申込完了いたします。

口座記号番号: 00870-5-184160

口座名: 名大農林産創立50周年記念同窓会

申込〆切: 2015年6月19日(金)

問合せ:

樋口晴一(S45卒, seihiguchi@kuc.biglobe.ne.jp)

加藤猛雄(S46卒, takeo-katoh@woodfriends.co.jp)

佐藤友彦(S53卒, sato.tomohiko@inabata.com)

竹原章宏(S63卒, p5327@dmail.daiken.co.jp)

佐々木康寿(S51卒, yasaki@nagoya-u.jp)

福島和彦(S60卒, kazu@agr.nagoya-u.ac.jp)

主催: 名古屋大学農学部林産学科創立50周年記念祝賀会実行委員会

同総会寄付者一覧

(2014.2.1 ~ 2015.1.31)

本年度、農学部同総会に対し以下の方々より寄付金をいただきました。ありがとうございました。(敬称略)

青木 照護	青木 隆夫	青木 瑞希	赤塚 秀次	浅野 迪裕
飯田 治利	池田(酒井)みち子	石河 正則	石堂 圭太	伊藤 憲一
稲田(山本)充男	稲葉 豊一	犬飼 武	井野 輝夫	植田 幸秀
梅原(市原)貞臣	梅村(永津)武夫	大岩 仁志	大島 光昭	大角 泰夫
加藤 壽郎	神谷 典明	川岸 舜朗	川端 史郎	川村 悌次
木村 昌博	倉田 貴生	河 ヨンシュ	小澤 伸一	近藤 克成
坂上 茂	佐橋(川上)知子	澤木 良次	菅原 邦生	杉山 茂雄
鈴木 義雄	須田(岡田)扶佐子	住 達彦	高橋(山崎)登枝子	高橋 雅彦
竹内 久直	竹原 章宏	多田 歩未	舘本 勲武	田中 啓文
田淵 彰彦	塚崎 和彦	堤内 要	恒良 利男	中條(川本)隆治
中井 國治	長坂 光司	中島 一郎	永田 卓真	中野 元
成瀬 和也	丹羽 栄二	野間 順一	萩野栄一郎	橋本 和彦
長谷川利行	長谷川靖彦	八田 洋章	浜本 晋	早川 茂
林 高彦	林 隆治	坂 恒豊	樋口 晴一	平野 年秋
福井 敏夫	古澤 弘道	古田 隆則	細井(井上)力	穂積 和夫
堀江 祥允	前川 謙吉	馬路(山谷)明子	馬路 泰蔵	馬淵 都子
三浦 由雄	水野 薫	森 耕太	森 英樹	森 博徳
森下二三夫	柳沢(齊藤)博史	柳瀬 仁茂	山口 章	山下 興亜
由比 進	横井 智規	横地 修	吉田(松本)康	若菜 茂晴
渡辺 広次	JOHN ROSS GATHRIGHT			

全学同窓会について

名古屋大学の同窓生等の社会的な活動について広く情報共有し、大学と同窓生等のつながりをより強めるために、また専門分野を超えての情報交流が以前にも増して重要となっているなどの背景から、名古屋大学全学同窓会は設立され、部局同窓会と連携しながら部局横断的な活動を行っています。設立は平成14年で、現在の会長は、豊田章一郎氏(トヨタ自動車株式会社名誉会長)です。大学の社会へ向けての情報発信や、社会からの研究教育活動への参加や支援を受けることがますます強く求められる今日、社会とのパイプを持つ全学同窓会は、大学の発展にとってもその役割が期待されています。農学部同窓会からは、3名が全学同窓会幹事会に参加し、また柴田和憲氏(アサヒビール株式会社常務取締役 生産本部長; S54農芸化学科卒)と生命農学研究科長には評議員を勤めて頂いています。

平成26年度は以下のような活動を行いました。

1. 社会貢献人材バンクの名簿整備

大学が運営する「卒業生等名簿システム」の整備と運営に対する協力や、住所等移動データの整備とそのデータの部局同窓会への提供などが行われました。

2. 財政基盤整備

支援会員の募集や支援会費自動引落利用者の拡充、同窓会カード(クレジットカード)の普及と優待店舗の開拓、および活動協力金に関する様々な取り組みが行われました。

3. 拠点形成

関東支部、遠州会ならびに関西支部との連携・支援、および海外支部の新規設立と各海外支部との連携強化について取り組みが行われました。既設の支部(韓国、バングラディッシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、

台湾、ラオス、ミャンマーおよびインドネシア)に加えて、平成26年度にはフィリピン支部が新たに設立されました。

4. 運営基盤の整備

10月18日の名古屋大学ホームカミングデーにあわせ評議員会が開催されました。その他、部局同窓会やクラブ活動同窓会との連携する活動が行われました。11月26日には、平成24年まで中国の特命全権日本大使を務められた丹羽宇一郎氏(名古屋大学全学同窓会副会長)を招き「グローバリゼーションと日本の将来」と題した講演会を開催するとともに夕食会が行われました。また、名古屋男声合唱団創立10周年記念演奏会を後援しました。

5. 学生支援

名大祭への協力、同窓生が講師を務める寄付講義「キャリア形成論」の支援、「真の多文化共生を目指すパブリック・アウトリーチ・プロジェクト in 名古屋(POPIC)」の支援や「就サポ presents」への支援等が行われました。また、豊田会長が入学式・卒業式へ出席し、祝辞を述べました。アカデミックガウンの発注、輸入等の支援も行われました。

6. 大学支援

ホームカミングデーの共催と支援を行いました。また、全学同窓会は毎年、「大学支援事業」として学生活動、就職支援事業、本部・部局事業(講演会、寄付講義など)、およびその他の同窓会理念に沿った事業の支援を行っています。上記、学生支援も一部はその一環として行われています。

7. 広報活動

メールマガジンや Newsletter の発行、ホームページによる部局同窓会行事、OB による行事等の紹介などが行われました。

事務局だより

事務局では農学部同窓会会員録データの改定を行っています。転居および転勤の際は、同窓会事務局(dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp)までご連絡ください。今後も会員の皆様からのご質問・ご要望にお答えしてまいりたいと考えております。ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

各種高圧ガス及び設備の設計・施工
高圧ガス関連機器・各種実験機器

有限会社 アルファシステム
<http://www.alphasystem.biz/>

〒465-0005

名古屋市名東区香流1-415
TEL 052-776-4567
FAX 052-776-4568

α system

全国同窓会名簿作製・同窓会アドバイザー

SALAT
Salat Corporation

株式会社 サラト <http://www.salat.co.jp/>

本社 兵庫県姫路市北条宮の町172
Tel.079-284-1380 Fax.079-224-7746

理化学器械・研究設備・光学機器・ガラス器具

主要取扱メーカー

アズワン	三洋電機
東京理化	タイテック
旭硝子	日本エイドー
久保田商事	アドバンテック東洋
名古屋三立製作所	

MZH
株式会社 **みずほ理化**

〒468-0066 名古屋市天白区元八事一丁目33番地
TEL 052-831-8800
FAX 052-834-4117
E-mail: mizuhorika@k2.dion.ne.jp

コミュニケーションの進化に対応する

 株式会社 **クイックス**
URL <http://www.kwix.co.jp/>

印刷を核に情報産業を担う企業として、
新時代のコミュニケーションの輪を
拡げています。

■本社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
TEL (0566)24-5511 / FAX (0566)26-0200
■名古屋本部 〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20
TEL (052)871-9190 / FAX (052)889-1410

農学部同窓会事務局では、広告の募集をしております。本会報の発行部数は、
現在約7,900部で、本学農学部関係者に配布されています。会社の広告、同窓会
の通知などにご利用下さい。

詳しくは、同窓会事務局まで。